

～心臓病 予防・治療最前線～

日本人の死因の第2位は心臓の疾患です！



川崎幸病院副院長
心臓病センター長
塚本喜昭



今年の冬も病院の救急外来に胸痛を訴えて来院される患者さんが多くいらっしゃいます。救急外来の胸痛では、特に3つの疾患を見逃さないことが重要と言われています。「急性心筋梗塞」「大動脈解離」「肺動脈血栓塞栓症」です。他にも逆流性食道炎や肋間神経痛など胸痛の原因となる疾患はありますが、上記の3つは命に関わることが多い疾患だからです。

とくに前者2つは、冬季に増える印象があります。急性心筋梗塞は、心臓を取り囲むように冠状に走っている動脈（冠動脈）のブラーク（血管の中のコレステロールの塊のようなもの）が破裂したり、びらんのため冠動脈内で血栓が作られ、それにより冠動脈が閉塞することによりおこります。

急性心筋梗塞がどうして冬季になると増えるのかは、きちんと証明されていませんが、やはり寒さ（あるいは屋内と屋外の温度差）により交感神経が緊張して、血管のトーンが変化したり、血圧が上昇することが影響しているのではないかと考えられます。実際には冬の寒さの中だけではなく、暖かくなったけれども急に冷え込んでくるような季節の変わり目の時期の方が心臓には負担がかかっているとも言われています。

人間の体は自律神経の働きで体温を一定に保っています。このため暑い時には身体の表面に近い細い血管を大きく広げて、血液を多く流し熱を体の外に逃がします。反対に寒い時には血管を縮めて、血管の中を流れる血液を減らすことにより熱が体の外に逃げないようにします。血管が縮んで細くなると、心臓はより大きな力で血液を送らなければならないため血圧が上がります。暖かい室内から急に寒い屋外に出た時のように急激な温度変化が起きると、人間の体は熱を逃がさないように血管を縮め、それにより血圧が上がる事になります。血圧が上がると心臓は大きな力が必要なため負担が増えて、心不全等の病気を引き起こす危険があります。

暖かくなったと思ってもまだまだ三寒四温が続きます。気温変化そのものを避けることは難しいですが、屋内でもトイレや脱衣所の室温を上げておいたり、急に冷え込む日には十分保温を心掛けて外出したりして、温度差の少ない生活をすることが重要かと思われます。

どうか心筋梗塞に至る冠動脈狭窄のシグナルを見逃さないでください。前胸部の圧迫感や締め付けられる感じまた、労作時の息切れや冷や汗などを感じたら、すぐに医療機関を受診してください。現在は、外来でもCT検査を用いて、かなりのレベルまで冠動脈の狭窄を調べができるようになりました。どうぞ、お気軽にご相談ください。



【川崎幸クリニック 循環器科 担当表】

	月	火	水	木	金	土
午前	津田	猪原	笹島・高橋	山㟢	工藤・大関	担当医交代制
午後	村井	塚本	村井・塗木・笹島	山形	工藤	-----
夕診	-----	-----	大村	相澤	-----	-----

